

2014年度
第11回モニタリングサイト1000
シギ・チドリ類調査
交流会 鹿島(佐賀)

要旨集



日時:2014年10月18日(土) 13:00~17:00
会場:鹿島市民会館 第4会議室 1F

2014年度 第11回モニタリングサイト1000シギ・チドリ類調査交流会 鹿島(佐賀) プログラム

日時:2014年10月18日(土) 13:00~17:00

会場:鹿島市民会館 第4会議室 1F

- | | |
|---------------------------------------------------------------------|--------------------|
| 0. 開会 | 13:00~ |
| 開会挨拶 | |
| 1. 自然環境モニタリング | 13:05~13:45 |
| 1-1・モニタリングサイト1000と生物多様センターのモニタリングの取り組み
環境省自然環境局生物多様性センター | 木村 元 |
| 1-2・モニタリングサイト1000 シギ・チドリ類調査
NPO法人 バードリサーチ | 守屋 年史 |
| 2. 有明海の調査サイト | 13:45~14:25 |
| 2-1・鹿島新籠・大授搦・早津江川河口(仮)
鹿島新籠 調査代表 | 宮崎 八洲雄 |
| 2-2・荒尾干潟の現状と課題
日本野鳥の会熊本県支部 | 安尾 征三郎 |
| 休憩 (35分) | ポスターなど |
| 3. 九州の調査サイト | 15:00~16:20 |
| 3-1・八代海球磨川河口干潟に飛来するシギ・チドリ類
日本野鳥の会熊本県支部、八代野鳥愛好会 | 高野 茂樹 |
| 3-2・大分県中津干潟シギ・チドリ類調査
中津干潟 シギ・チドリ類 集中調査グループ
NPO法人南港ウェットランドグループ | 和田 太一 |
| 3-3・博多湾(福岡湾)のシギ・チドリの現状と今後
NPO法人ふくおか湿地保全研究会 | 服部 卓朗 |
| 3-4・宮崎県の沿岸環境とシギチドリ類
宮崎大学 農学部・一ツ葉入江調査員代表 | 三浦 知之 |
| 4. 意見交換 | 16:20~16:50 |
| 5. 閉会 | |

ポスター発表

- 6-1・大分県中津干潟で観察された干潟性水鳥の興味深い採餌内容・採餌行動
中津干潟 シギ・チドリ類 集中調査グループ
NPO法人南港ウェットランドグループ 和田 太一
- 6-2・多摩川、千曲川および鬼怒川におけるイカルチドリとコチドリの分布と営巣環境の選好性
NPO法人 バードリサーチ 笠原 里恵
- 6-3・江戸川区葛西のシギ・チドリ類
千葉県立中央博物館 桑原 和之
江戸川自然観察クラブ・日本野鳥の会東京
・千葉市野鳥の会 鈴木 弘行
日本野鳥の会東京 田久保 晴孝・飯田 陳也
ブレック研究所 今井 優
千葉市野鳥の会 箕輪 義隆

懇親会 18:00～

エクスカージョン

10/19(日) 8:30 発 スカイトワーホテル駐車場集合
有明海沿岸部(鹿島新籠・大授搦など)

モニタリングサイト1000 と生物多様センターのモニタリングの取り組み

木村 元(環境省自然環境局生物多様性センター)

環境省生物多様性センターでは、平成15年度から日本の自然環境を長期的に観測する重要生態系監視地域モニタリング推進事業(モニタリングサイト1000)を実施しています。

日本の国土は、亜寒帯から亜熱帯にまたがる大小の島々からなり、そこには屈曲に富んだ海岸線と起伏の多い山岳など、変化に富んだ地形や各地の気候風土に育まれた多様な動植物相が見られます。モニタリングサイト1000では高山帯からサンゴ礁まで様々な生態系を約1000の地点でモニタリングし、日本の自然環境の質的・量的な変化をとらえています。

モニタリングサイト1000が開始してから10年が経ち、各生態系のデータがたくさん集まっています。各生態系で、5年を1期とした第2期とりまとめ報告が順次発表されているところであり、シギ・チドリ類調査以外の生態系の調査についてもモニタリングの状況を解説します。

生物多様性センターでは、モニタリングサイト1000以外にも自然環境保全基礎調査などの長期にわたる調査を行っていますが、全国の生物情報を一元的に収集・提供するインターネット上のシステムである「いきものログ」を昨年からは開始しました。行政、研究者から生きものに興味のある一般の方までだれでも利用することができ、個人や団体に調査・観察の記録を管理するツールとして使うことができます。自然環境保全基礎調査などこれまで生物多様性センターが行った調査結果など430万以上のデータが蓄積されており、今後も全国で確認された、あらゆる生きものの情報を蓄積していきます。



図：モニタリングサイト位置図。

モニタリングサイト1000 シギ・チドリ類調査

守屋 年史(NPO法人バードリサーチ)

シギ・チドリ類調査は、主体を変えながら30年以上続く全国的な調査である。2004年度から環境省事業モニタリングサイト1000シギ・チドリ類調査に引き継がれ、当会は2008年度から事務局を務めている。

この調査は、全国に100ヵ所以上の調査サイトがあり、多くの一般ボランティアによって調査が支えられている。継続的なモニタリング調査の結果は活用され、ラムサール登録の基礎資料や、絶滅危惧動物(レッドデータリスト)の検討のための参考資料として利用されている。

今回は、調査体制、長期モニタリング調査の重要性や、調査の結果からみえるシギ・チドリ類の状況について報告する。

○モニタリング調査体制

調査は、春(4～5月:繁殖のため北に向かう)、秋(8～9月越冬のため南に向かう)、冬(12～2月:日本国内で冬を越す)の年3シーズンに実施されている。期間中に複数回調査を行いその各種の最大数を合計し、最大渡来数としている。また一斉調査日という日を設け、全国で一斉に個体数を数える調査を行なっている。

○長期モニタリング調査

モニタリング調査で最も重要なことは、長く同様の調査を継続していくことである。基になるデータがあれば、環境変化が起こっても比較できる。また将来的な変化についてもある程度予測することができる。

そのためには、無理のない調査を設定することや、仲間と共同して調査する体制をつくることが望ましい。また、拠点となる場所ができるのは、調査に関心のある人に接点を設けるという点で非常に有効である。調査グループがあると、なお継続しやすい。

○シギ・チドリ類の状況

シギ・チドリ類の多くは、極北から東南アジア・オセアニアを往復する旅鳥である。国内では春期に最も多く観察される。しかし、シギ・チドリ類は1970年代と比較すると大きく減少し、2000年以降もゆるやかな減少傾向が引き続き続いており、生息環境の保全が重要な課題となっている。

荒尾干潟の現状と課題

安尾 征三郎（日本野鳥の会熊本県支部）

●今、市民に何が起きているか？

1. 2006年から、『荒尾干潟の鳥たち』の写真展をバードウィークや環境フェスタなどで行っております。熊本県庁のロビーでもおこないました。荒尾干潟にやってくる鳥たちのこと、荒尾干潟のすばらしさを広く市民のみなさんに知ってもらうことに努めてきました。
2. 野鳥写真展時にアンケートを実施しています。野鳥観察会に「参加したい」「時間があったら参加したい」と、85%の方が思っておられることもわかりました。
3. 野鳥の会では、1980年代から1月、4月、9月に荒尾海岸で野鳥観察会を行ってきました。今では、沿岸地域のみなさんと一緒に野鳥観察会を行っております。2012年105名、2013年133名、2014年190名の市民が参加しています。
4. 荒尾干潟シギ・チドリ類調査の結果、写真展ではアンケートの結果を行政や市議会、環境保護団体、市民のみなさんに報告して、荒尾干潟の野鳥保護と環境を守る資料としています。
5. 2012年7月3日、荒尾干潟がラムサール条約湿地登録されました。また、その1周年を記念した『荒尾干潟の日』に、『東アジア・オーストラリア地域フライウェイ・パートナーシップ(EAAFP)』に参加が認められました。
6. 荒尾干潟、ラムサール条約関連のイベントに、想定外の市民が集まります。
7. 荒尾干潟で野鳥観察、写真撮影など訪れる人が増えました。

●子どもたちとの取り組み

荒尾干潟がラムサール条約登録湿地となり、「干潟を保全して活用していくこと、未来を担う子どもたちにどう引き継いでいくか」大きな課題であります。

●小学校・中学校が野鳥及び干潟の学習

- ◆ いま、荒尾市や環境保護団体、観光協会、市内の各種団体では干潟で遊ぶ、干潟で学ぶ取り組みが行われています。
- ◆ 荒尾市の小学校・中学校へ出向き、ラムサール条約のこと、野鳥や干潟の話をしています。中学校の文化祭で荒尾干潟野鳥写真展が行われました。
- ◆ 小学校でも総合的学習に『干潟の学習』がとりいれられ、潮干狩りや、野鳥観察会が計画され、干潟に親しんでいます。桜山小学校は学校だよりに「シロチドリ」の名をつけています。
- ◆ 今年の『荒尾干潟の日』は、干潟の生きもの観察会を行いました。朝、小雨が降っていましたが、大人29人、こども47人が参加し、楽しい観察会となりました。
- ◆ 沿岸地域では小学生・中学生・高校生が「海をテーマ」にした絵をベニヤ板に描き、海岸の堤防に展示し『海の美術館』と親しまれています。
- ◆ 交通手段の確保
- ◆

●荒尾干潟の課題

- ビジターセンターの設置
- 保全や利活用を検討する横断的な庁内組織を設置すること
- 荒尾干潟保全・賢明利活用協議会に実務者担当部門を設けること
- 行政、環境団体、観光協会、ボランティア団体等の情報の共有(ネットワーク)
- 荒尾干潟案内人の設置を急ぐ (ボランティア)
- 国道、県道から干潟への案内板を設置する
- 干潟堤防に案内板の設置 (案内経路、鳥見ポイント、潮汐、)
- トイレの設置・整備を急ぐ

八代海球磨川河口干潟に飛来するシギ・チドリ類

高野 茂樹(日本野鳥の会熊本県支部、八代野鳥愛好会)

熊本県のシギ・チドリ類の主な飛来地は、有明海の荒尾干潟、白川河口一帯、八代海の不知火干潟、氷川河口、球磨川河口などがあり、いずれもモニタリング1000のコアエリア調査地とされている。

1) 熊本県飛来地の飛来状況

荒尾干潟、白川河口、不知火干潟、氷川河口、球磨川河口において、2011年秋期から2012年春期までに記録されたシギ・チドリ類の種類は37種であった。春期は荒尾干潟においてオオソリハシシギ、トウネン、キョウジョシギとミユビシギなどの飛来数が多く、白川河口のダシギとタカブシギが他飛来地には飛来しない種であった。シギ・チドリ類個体群は、2011年秋期の氷川河口を除いて、類似度40%でまとめられ(MDS多次元尺度構成法分析)、冬期の5飛来地のグループ、荒尾干潟の春期と秋期のグループ、白川河口の春期と秋期のグループそして八代海の春期と秋期のグループに分けられた。冬期は有明海・八代海で似た種群が越冬し、春期と秋期には干潟毎に利用する種群が異なっているようだ。

2) 球磨川河口の飛来状況

球磨川河口で観察されたシギ・チドリ類について、飛来数(2002年-2006年の各月最大飛来個体数)をグラフ化すると飛来タイプが春型、秋型、春秋型、越冬型に分けられた。春型はチュウシャクシギ、秋型はトウネン、オバシギ、ソリハシシギ、春秋型はアオアシシギ、キアシシギ、オオソリハシシギ、ホウロクシギなど、そして越冬型はシロチドリ、ダイゼン、ハマシギであった。

2008年秋期～2012年冬期の右岸・左岸毎の種・個体数/日を用いた解析(MDS)では、季節毎にグループされ、各季節では右岸と左岸で多少の差異が認められた。平均飛来種数は春期13.1種、秋期13.8種そして冬期5.7種で春期と秋期は大差はなかったが、冬期は少なかった。右岸・左岸毎に飛来個体数/日を季節別に見ると、春期は右岸461.4羽、左岸234.4羽、秋期は右岸83.6羽、左岸103.0羽そして冬期は右岸770.7羽、左岸237.7羽であった。春期と冬期は右岸と左岸で有意差が認められ($p < 0.05$, t-test)、右岸側が多かった。季節毎の経年変化については、春期と冬期は右岸、左岸共に増加し、秋期は左岸は変化がなく右岸では減少傾向であった。

種別の傾向では、春期はダイゼンとハマシギにおいて右岸・左岸の個体数に有意差が認められ、右岸側に多かった($p < 0.05$, wilcoxon-test)。秋期はアオアシシギとキアシシギにおいて有意差があり左岸側で多く、冬期は主要種シロチドリ、ダイゼン、ハマシギ共に有意差が認められ右岸側が多かった($p < 0.05$)。

3) 球磨川河口右岸堤防工事の影響

①秋期…年度別、右左岸別に種毎の個体数/日が計算された。調査日は各年、12-27日であった。5年間(2009-2013年度)に25種が観察され、飛来数が多い種はソリハシシギ、キアシシギ、ダイゼン、アオアシシギなどであった。右岸において、シギ・チドリ類個体群(17種)の2012年と2013年の個体数中央値には有意差が認められた($p < 0.01$, wilcoxon-test)が、左岸個体群(13種)では有意差はなかった($p > 0.05$)。

②冬期…調査日は各年、9-28日であった。5年間(2009-2013年度)に10種が観察され、飛来数が多い種はハマシギ、ダイゼン、シロチドリなどであった。右岸シギ・チドリ類個体群(6種)の2012年と2013年の個体数/日の中央値には差がなく($p > 0.05$)、左岸個体群(5種)でも同様であった。

③春期…調査日は各年、12-27日であった。5年間(2010-2014年度)に15種が観察され、飛来数が多い種はハマシギ、ダイゼン、チュウシャクシギ、キアシシギなどであった。右岸シギ・チドリ類個体群(16種)の2013年と2014年の個体数/日の中央値には差がなく($p > 0.05$)、左岸個体群(14種)でも同様であった。

4) まとめ

①熊本県飛来地では、春期は八代海で高い類似性が見られ、秋期は白川河口、不知火干潟、球磨川河口の類似性が高かった。冬期は、5つの飛来地で種構成は似ていた。

②球磨川河口では、シギ・チドリ類の飛来型は、春型(チュウシャクシギ)、秋型(トウネン、ソリハシシギなど)、春秋型(アオアシシギ、キアシシギなど)と越冬型(ハマシギ、シロチドリなど)に分けられた。

③球磨川河口の右岸と左岸への飛来個体数は、春期と冬期は右岸側が多く、秋期は差がなかった。

④種類別では、春期と冬期ではハマシギの個体数の差が大きく、右岸側に飛来が多かった。秋期はキアシシギ、アオアシシギが左岸側が多かった。

⑤球磨川河口右岸側堤防工事(2013年)では、開始された当初の秋期に右岸側において、前年(2012年)との間で飛来状況が有意に変化した。

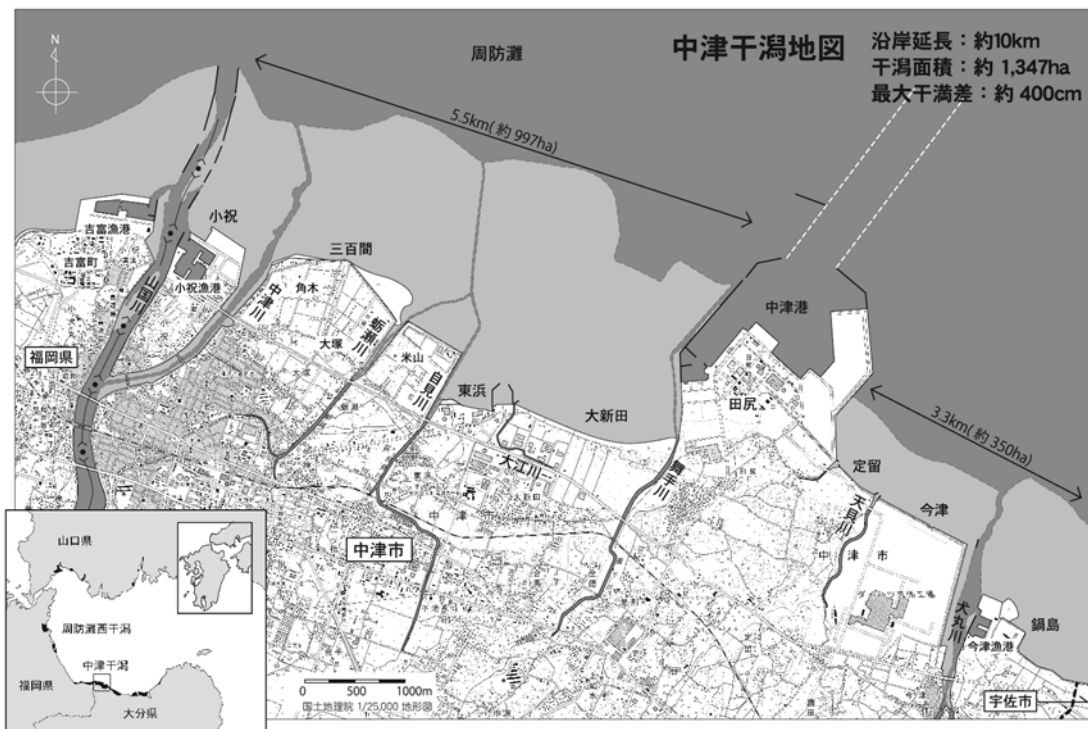
大分県中津干潟シギ・チドリ類調査

和田 太一

(中津干潟シギ・チドリ類研究グループ代表、NPO法人南港ウェットランドグループ理事)

大分県中津市沿岸に広がる中津干潟は総面積が1,347 haで、北九州市から豊後高田市まで続く豊前海干潟のほぼ中央に位置しており、カブトガニやアオギスに代表される干潟の絶滅危惧種の国内最大規模の生息地であるとともに、シギ・チドリ類の飛来地としても知られている。中津干潟を利用しているシギ・チドリ類の現状を把握するため、地元で中津干潟の保全活動を行っているNPO法人水辺に遊ぶ会と、大阪のNPO法人南港ウェットランドグループ、福岡のNPO法人ふくおか湿地保全研究会、WWFジャパンなどの有志らで結成した「中津干潟シギ・チドリ類研究グループ」によって2003年からシギ・チドリ類の総合的な調査が行われてきた。今回は水辺に遊ぶ会発行の「中津干潟レポート2013」に収録されている2013年秋期までの結果を中心に、今年度のこれまでの状況も加えて中津干潟におけるシギ・チドリ類の現状と調査体制について紹介する。

シギ・チドリ類の個体数調査は2003～2004年の2年間(シーズンにほぼ毎週カウント)と、2011年～現在(シーズンごとに1回の集中調査を実施)まで継続して行われている。私たちの調査結果をモニタリングサイト1000の全国データと照らし合わせると、2011年春季(5872羽:実質全国第2位に相当)や2012年冬季(3629羽:実質全国第3位に相当)など、中津干潟は全国的にも有明・八代海などと並ぶほどの大規模飛来地であることが明らかとなってきた。とくにダイゼン(春・秋・冬に200～400羽前後)・キョウジョシギ(秋に100羽前後)・ハマシギ(春・冬に2000～5000羽前



図：中津干潟地図。

後)・オバシギ(春・秋に100羽前後)・オオソリハシシギ(春に150～200羽前後)などの飛来数が多く、重要な中継地・越冬地となっている。

干潟の利用状況調査からは春・冬期は東浜～大新田を主に利用しているのに対し、秋期には三百間をよく利用しており、季節によって干潟の利用状況が異なることがわかった。さらに満潮から干潮まで1時間ごとに一斉カウントを行った調査結果からは、潮の引き初めや満ち終わりの群れが海岸に寄ってきた時間帯よりも、干潟が広く干出した最大干潮時の方が個体数は多くなることなどもわかってきた。広大な中津干潟でシギ・チドリ類の最大飛来数や利用状況を把握するためには、干潟をいくつかの区域に分けて、調査員をそれぞれに配置して広い範囲をカバーし、干潮時に沖まで歩いて行って一斉にカウントすることが必要であると考えられる。

満潮時のねぐらは複数の場所が観察されているが、いまだ完全には把握しきれていない。最近よく利用していると考えられるのは豊前市沖のカキ養殖イカダの上で、潮が引き始めると多くの群れがその方向から飛来することが観察される。しかし海岸のはるか沖に浮かぶイカダ上はどんな高倍率のプロミナーを用いてもカウントは到底無理で、満潮時にねぐらでのカウントが行えないことが中津干潟の調査の難点でもある。

ズグロカモメは中津干潟では例年50～70羽ほどが越冬しており、隣の宇佐市の越冬群と併せて豊前海の干潟は国内でも重要な越冬地の一つである。中津干潟における近年の最大カウント数は2006年冬期の85羽で、2013年冬期には55羽がカウントされている。

また近年ヨシガモの越冬数が増加しており、2013年冬期には大新田地区(1～2 kmほどの範囲)だけで2000羽を超え、国内でもずば抜けた飛来数の越冬地であることが明らかとなった。春も5月中頃までは500～700羽ほどの群れが滞在している。

シギ・チドリ類調査の全国的な問題として調査員の高齢化・後継者不足が現実的に起こってきている中で、中津干潟でのシギ・チドリ類調査は地元の団体と他の干潟で活動しているメンバーが協力・交流して調査を行い、調査の技術や干潟の歴史をベテランから若手へと受け継ぐ場にもなっており、今後のシギ・チドリ類調査の在り方を考えるひとつの事例と言えるのではないだろうか。

中津干潟のシギ・チドリ類調査は今後も継続していき、ズグロカモメやカモ類などのデータも併せて報告書としてさらにまとめる予定である。

博多湾(福岡湾)のシギ・チドリ現状と今後

服部 卓郎(NPO法人ふくおか湿地研究会)

博多湾(福岡湾:以下、博多湾で表記)で確認できるシギ・チドリ類は、年々、個体数、種数、とも減少傾向にあります。

このことに関しては、気候変動などによる地球環境の変化によって、東アジア・オーストラリア・フライウエーのシギ・チドリ類の総個体数減少が原因なのか、または博多湾自体の環境の変化が原因なのか、はっきりしたことは明言できません。

ただ、朝鮮半島から最短距離で約200kmの位置にあり、過っては、日本海側では稀な干潟が存在していた博多湾はシギ・チドリを含む多くの水辺の鳥類にとっては重要な中継地、

越冬地として機能していたはずですが、しかし、今まで、高度成長期以前から現在に至るまでの博多湾の湿地環境の変遷についてはあまり語られていませんでした。

温故知新と言う格言がありますが、今後の博多湾に於けるシギ・チドリ類の行く末のことを考えるに、今ある湿地環境の保全はもちろんですが、湿地環境の再生ということが大きなテーマになると思われます。今回の発表では、今まで当会がおこなってきたシギ・チドリ類の調査データに基づいた報告と今後についての提言を行いたいと思います。

パワーポイントを使った報告内容

●博多湾の変遷

(高度成長期以前から現在までの博多湾の変遷について地図等を使って説明)

●博多湾の現状

(特に、狭い範囲内での環境破壊が進んだ博多湾東部に付いて)

●博多湾内の調査箇所の状況報告

(既存の調査報告と年間を通じてのシギ・チドリの餌場、休息場に付いて)

●今後の博多湾

(種数、個体数、の減少を軽減するには?)

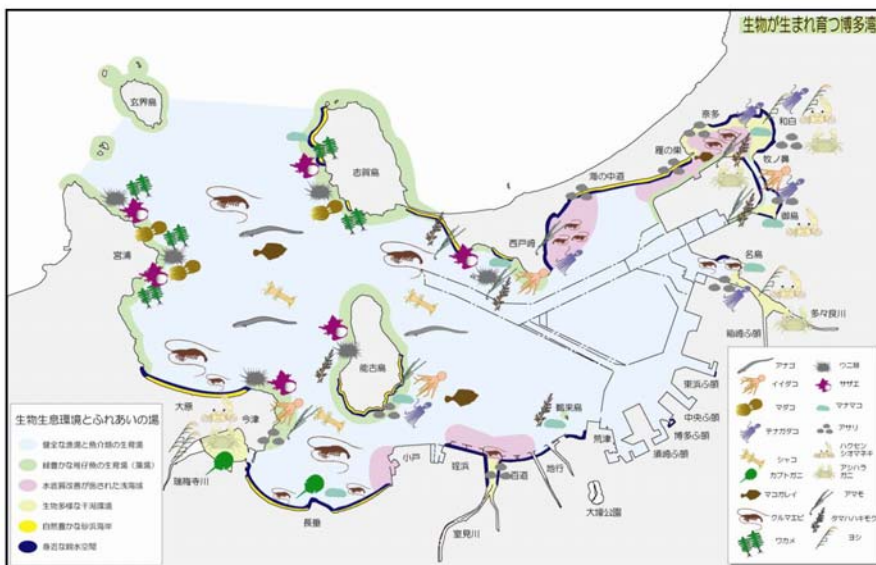


図:博多湾の将来像
(多様な生物):
博多湾環境保全
計画(博多市、
1992)より

宮崎県の沿岸環境とシギチドリ類

三浦知之(宮崎大農)

miurat@cc.miyazaki-u.ac.jp

九州の干潟については北部九州と有明海があまりにも有名で、自然海岸が近くある宮崎県の沿岸環境や海洋生物についてはほとんど知られていない。また、シギチドリ類の多くが飛来する干潟や河口汽水域についても正確な広さすら把握されていなかった。2001年に宮崎に転任してから、海岸環境の生物相調査を行うとともに、飛来鳥類も観察できたので、その概要を発表する。

宮崎県の干潟は380ha程度であり、1997年諫早干拓で長崎県が消失した干潟干出面積1860haに比べても、せいぜい1/5程度である。しかし、日向灘に面した300kmほどの海岸線は南から九州東岸を北方に渡るシギチドリにとっては休息や採餌に重要である。この一帯は太平洋に直接洗われ、干潟の発達しにくい海岸線であるが、ゆったりした大きな河川が平野部に湿地と潟湖を発達させる。その代表例として、富田浜入り江と水田の広がる一ツ瀬川河口域には多くの水鳥が飛来する。他にも南部の本城川河口干潟、北部の櫛津干潟、熊野江川河口干潟など、たくさんの希少生物が棲息する小規模な干潟も散在する。かつては一ツ瀬川と同様に広い河口域のあった大淀川水系には宮崎港の開発によって12haしかない潟湖(一ツ葉入り江)が残されている。

日本で記録されるシギチドリ約150種のうち、宮崎には72種が飛来する。一ツ葉入り江ではこれまで29種が確認された。この潟湖について2002年から2004年までは学生の観察記録が残され、糞やペリットからの餌の分析も行った。また、2007-2014年は三浦が飛来記録を取っている。

一ツ葉に飛来するシロチドリは観察を開始して以来、少しずつ数が減り、かつては見られた営巣も確認されなくなった。他方、ハマシギは増加傾向にあり、希に300羽を超える群れが飛来し、例年越冬個体が10-20羽程度見られる。キアシシギは最高30羽程度が、4月末から10月末までほぼ途切れずに観察される。ホウロクシギは最大4羽が記録されているが、7月中旬から10月中旬まで90日滞在した個体も確認されている。チュウシャクシギは春と秋の渡りで通過するが、春には数百羽の群れが宮崎港周辺に現れ、その一部が一ツ葉入り江を利用するものと考えられる。

一ツ葉入り江はシギチドリ類の採餌場として主に利用されている。餌生物の内、糞には未消化物として甲殻類の鉗脚やゴカイ類の剛毛が含まれている。また、ペリットには主に甲殻類の殻だけが含まれていた。シギチドリ類は殻のない生物は丸呑みにし、未消化の剛毛だけが排泄する反面、甲殻類の殻は栄養にならないため、ペリットとしてはき出していると考えられた。いずれの分析においても定量化できた甲殻類では、干潟に数多いコメツキガニが高率に含まれていた。

一ツ葉入り江には他の水鳥も飛来するが、特にコアジサシについては地域住民と共同で保護活動を行っている。今年は浮き島による営巣地造営も行ったので、その成果についても紹介する。

ポスター

大分県中津干潟で観察された干潟性水鳥の興味深い採餌内容・採餌行動

和田 太一

(中津干潟シギ・チドリ類研究グループ代表・NPO法人南港ウェットランドグループ理事)

九州には有明・八代海や豊前海などに広大な面積の干潟がまだまだ残されているが、そうした広大な干潟では潮が引くとシギ・チドリや水鳥たちは遙か沖へと移動していき、海岸からの観察だけでは沖合の干潟での水鳥たちの生態を知ることは難しい。

大分県中津干潟は中津市沿岸全域に干潟が干出し、大潮の干潮時にはおよそ2.5 km沖まで歩いていくことができる。広大な干潟で水鳥たちが何を食べているのか、主に2013年から2014年に中津干潟で調査・観察された興味深い生態を写真で紹介する。

ダイゼンは中津干潟では毎年200～400羽前後が観察され、冬から春にかけては潮が引いた前浜干潟で、干潟に出来た浅い水たまりや汀線沿いにいるカレイ類(イシガレイ・マコガレイなど)の稚魚を高頻度で捕食していた。カレイ類の稚魚はゴカイやカニなどよりも簡単に捕まえられ、良い餌だと思われる。

キョウジョシギは中津干潟では越冬期にも数十羽が観察され、干潮時には前浜干潟の沖に移動し、ウミナナ類やイボキサゴなどの巻貝の殻に入ったテナガツノヤドカリをよく捕食していた。テナガツノヤドカリは左のハサミが大きく、殻に引っ込んでも大抵はハサミが中まで納まらずにはみ出している。キョウジョシギはこれを嘴でつまんで振り回し、殻からヤドカリを引きずり出して食べていた。前浜干潟にはテナガツノヤドカリが足の踏み場もないほど生息しており、沖へ行けば簡単に捕食できる餌が豊富にあるわけである。

ズグロカモメは中津干潟では、潮が引き始めた時間帯に干潟に飛来し、まず岸近くの泥干潟の上を飛び回りながら急降下してヤマトオサガニやテッポウエビを捕らえて丸のみしている。潮が引くとともに多くの個体は沖へと移動していき、次に少し沖のコアマモ帯や砂泥干潟に多産するオサガニをよく捕え、同様に丸のみしている。さらに最干潮時に干出する沖の砂質干潟では、砂質干潟に多産しているマテガイを専ら捕食していた。干潟の汀線付近の上空を飛び回り、急降下してマテガイを干潟から引っ張り出し、薄い殻を嘴で割って開けたり、殻の両端に開いた隙間から中身をつついて食べたりしていた。ズグロカモメは潮の引き具合によってそれぞれの場所に多産している底生生物を捕食しており、とくに沖の干潟ではマテガイを好んで捕食するという生態はこれまで知られていなかったと思われる。

ヨシガモは近年中津干潟で飛来数が増加しており、越冬期には2000羽を超える。ヨシガモは汀線沿いや漣筋沿いに分布して採餌し、砂泥質の干潟に繁茂したコアマモを好んで食べており、糞からもコアマモ片が多く見つかる。中津干潟のヨシガモの飛来数の多さは全国有数の規模のコアマモ群落の存在が関係しているのではないかと推測している。

多摩川、千曲川および鬼怒川における
イカルチドリとコチドリの分布と営巣環境の選好性

笠原 里恵 (NPO法人 バードリサーチ)

イカルチドリとコチドリは日本の河川で繁殖する代表的なチドリ類です。2種ともに河川の植物のまばらな、砂礫の露出した地上に皿状に浅い穴を掘って産卵し、おもに汀線で水生昆虫を採食します。しかし、過去の砂利採集や河川改修による流れの変化などで河川における砂礫地は減少傾向にあり、そのことはそこに生息する種に大きな影響を与えと考えられます。今後、砂礫地の回復や維持が必要になるなかでは、そこに生息する種の好む環境情報が重要になってきます。本研究では、イカルチドリとコチドリについて、異なる河川での分布と巣周辺の環境選好性を特に礫サイズに注目して検討しました。



調査は多摩川(東京都)、鬼怒川(茨城県～栃木県)、千曲川(長野県)の3つの河川で行いました。それぞれの河川の下流から上流にかけて複数の調査地点を設置し、2014年に繁殖密度の調査を行いました。巣を見つけた場合には、巣を中心に周辺1m²の写真を撮影し、その中に含まれる礫の大きさを計測しました。

分析の結果、イカルチドリは3つの河川のいずれでも下流から上流までの広い範囲で繁殖が見られました。その一方で、コチドリは河川によって分布が異なっており、例えば多摩川では下流から中流域で繁殖していたのに対し、鬼怒川ではイカルチドリと同様に下流から上流までの広い範囲で繁殖が見られました。この分布の違いは2種の選好する礫サイズの違いに関係していると考えられました。巣周辺の礫サイズはコチドリでより小さく、イカルチドリでは複数の大きさの礫が混合した環境を好む傾向が見られたのです。

今回の研究から、砂礫地の減少のうち、砂等のより細かな基質の減少は、特にコチドリに大きな影響を与える可能性があることが示唆されました。チドリ類の繁殖個体群の維持には、それぞれの(もしくは両方の)選好する礫サイズを考慮した河川管理が重要となると考えられます。

江戸川区葛西のシギ・チドリ類

桑原 和之(千葉県立中央博物館 E-mail: kuwabara@chiba-muse.or.jp)

鈴木 弘行1, 2, 3(1江戸川自然観察クラブ・2日本野鳥の会東京・3千葉市野鳥の会)

田久保 晴孝2・飯田陳也2・今井 優(プレック研究所)・箕輪義隆3

1. はじめに：

東京湾奥部の海岸には、広大な湿地が形成されていた。特に葛西沖は三枚洲と呼ばれる遠浅の海岸が広がり、多くの鳥類が飛来していた。1960年代から大規模にその湿地が埋立てられ、ガン類など大型の鳥類が飛来しなくなった。過去の鳥類相をまとめた報告は少なく東京都, 1975により東京湾の記録がまとめられ、桑原ら2000によって鳥類目録が報告された。近年の出現種に関しては、リスト化されている(鈴木ら2014)。現在の葛西の鳥類相に関しては、出現種についてはまとめられてはいるが、周年の個体数変動などの報告はまとめられていない。本報告では葛西海浜公園および葛西臨海公園、公園地先海上含む地域で記録された種の個体数に関する2005年の記録をまとめ、現況を報告する。



2. カウントの経緯：

葛西の鳥類の個体数調査は、埋立が進められた60年代以降、1970年から東京都により開始された。カウントの記録は日本野鳥の会・干潟研究会, 1975, 日本野鳥の会, 1976, 78, 81, などの報告書になり公表された。近年では、東京都, 1975や江戸川区や江戸川自然観察クラブなどによる定期調査が行われている(桑原・田久保, 1997)。また、近年は野鳥観察を目的とする来園者が増加し、観察記録も集積されている。

3. 2005年の生息状況：

チドリ科は、5種が記録された。シロチドリは2005年3月27日に最大50羽が記録されたが、個体数は8月から12月にかけて少なかった。メダイチドリでは、春の渡りの期間には少なく、2005年7月24日に最大の50羽を記録した。シギ科は、15種が記録された。ハマシギは、冬期の個体数が多く、春の渡りの時期に2005年4月24日に最多の400羽が記録された。また、チュウシャクシギ2005年4月24日に80羽、キアシシギが5月22日に50羽が記録され春の渡りの時期に多くの個体が記録されている。個体数は数羽～10羽程度と多くはないが、それ以外にも多くの種類のシギ類が春と秋の渡りの時期に観察された。セイタカシギは4月・8月に多く、主に鳥類園の池で観察された。ミヤコドリは4月に個体数が多く、主に東なぎさで観察された。

4. 減少した種：

2005年の記録と過去の文献などから、多くの種が減少していた。その中でも特にコチドリ、シロチドリ、ツルシギ、ハマシギなどの種の減少傾向が確認された。セイタカシギなどは、1990年以降に一時的に増加し、繁殖記録が得られたが、1990年以降、2007年まで断続的に繁殖し、ヒナが孵化していた。2008年以降は営巣し産卵までには至るが、外敵や巣の水没によりヒナは孵化しておらず、近年は減少の傾向があると考えられた。

桑原ら2000では、湿地の埋立てで多くの種が減少し、造成地では過去の鳥類相は回復されず、干潟の減少は個体数の少ない種の減少を促すとしていると示唆した。今後も湿地環境の保全が望まれる。

参考文献：

桑原和之・田久保晴孝. 1997. 東京湾の生物(鳥類相). 築地書館. 東京.

桑原和之・鈴木弘行・石黒夏美・田久保晴孝・東良一. 2000. 2-4. 江戸川区葛西鳥類目録. 東京湾の鳥類: 208-263. たけしま出版. 流山.

鈴木弘行・中村忠昌・川原章・川原光子. 2014. 葛西鳥類目録. 日本野鳥の会東京.

懇親会 18:00～

割烹 中央（鹿島市高津原新町3923）



エクスカーショ

10/19(日) 8:30 発 スカイタワーホテル駐車場集合
有明海沿岸部(鹿島新籠・大授搦など)





2014年度 重要生態系監視地域モニタリング推進事業
(モニタリングサイト1000)
シギ・チドリ類調査
第11回モニタリングサイト1000交流会(鹿島)要旨集 第11号
発行日:2014年10月18日
編集:守屋年史
発行:NPO法人バードリサーチ